

早稲田大学大学院 創造理工学研究科

博士論文概要

論文題目

H.P.ベルラーへの建築理念と意匠的特質に関する研究

Studies on Architectural Thoughts and Design Characteristics
of Hendrik Petrus Berlage

申請者

宇田	直史
Naoshi	UDA

建築学専攻 建築意匠論研究

2011年5月

本論文は、1880年代後半から1930年代前半にかけて活躍した、オランダの近代建築を代表する建築家ヘンドリック・ペトルス・ベルラーヘ（Hendrik Petrus Berlage, 1856-1934）の建築理念と意匠の特質に関する作家研究である。ベルラーヘに対する社会的な関心が高まりを見せたのは、ベルラーヘが1934年に亡くなって十数年後に、ベルラーヘの代表作であるアムステルダム証券取引所（通称ベルラーヘの取引所）が、かねてから進行していた圧密沈下により、建物全体が崩壊の危機に晒された1950年代に遡る。オランダ国内では、莫大な国費を投じて建物を修復すべきか否かについての議論が起こり、1959年には解体することが一旦は決定されたが、1961年には歴史的建造物として保存することが最終的に決定されたという経緯があり、そうした社会を巻き込んだ議論を契機として、ベルラーヘはオランダ建築史上、都市計画史上の研究対象として認識されるようになった。そうした中で、最初にベルラーヘに関するモノグラフを書いたのは、オランダの建築史家P.シンゲレンベルフ（Pieter Singelenberg）であり、その後ドイツの社会民主主義研究者M.ボック（Manfred Bock）、オランダの建築史家A.W.レイニンク（Adriaan Wessel Reinink）やN.H.M.ツンメルス（Nic.H.M.Tummers）といった研究者が後に続いた。その他の研究は、ベルラーヘと同時代の建築家の研究の中でベルラーヘを位置づけた論考、ベルラーヘの個々の建築作品を対象とした論考、ベルラーヘの著書や雑誌投稿論文を再録または翻訳して解説を加えたもの、オランダの近代建築・都市計画研究の中でベルラーヘを位置づけた論考、オランダの文芸運動研究におけるベルラーヘに関する論考、オランダの建築に対する外国の建築家の影響や共通性に着目した論考などに分類することができるが、それらの成果を整理した結果、ベルラーヘの思想については、未だに研究がなされていない部分があることや、体系的且つ学究的な検討が十分なされておらず、多様な思想が建築理念として捉えられていないことが指摘できる。また、日本国内においては、ベルラーヘの思想、建築理念、意匠について、一次史料に基づいて検討したものは見られない。

このような背景から、本論文の目的は、第一に、ベルラーヘの著書、講演録、雑誌投稿論文、新聞掲載記事等の一次史料及び既往研究の読解を行い、ベルラーヘの多様な思想に通底する建築理念を明らかにすることとした。本論文の第二の目的は、ベルラーヘの建築理念を踏まえて、ベルラーヘの建築作品を考察することとした。すなわち、ベルラーヘの多様な思想に対して建築理念という水準の枠組を与え、さらに、建築理念と意匠的特質との関係を明らかにすることである。したがって、本論文はベルラーヘの建築理念と意匠的特質に関するモノグラフであると言い換えられる。

本論文の特色は、まず、1880年代以降のオランダの文芸運動や、労働運動とベルラーヘの思想との関係に着目し、ベルラーヘの思想の多様性を示すと同時に、そこに通底する理念を示すことにより、多様性の中にある一貫性を捉えたことにある。もう一つの特色としては、ベルラーヘの建築作品の意匠的特質について、ベルラーヘの建築理念との関係において捉えることにより、ベルラーヘの建築作品の系譜を、従来の断続的な捉え方ではなく、連続的に捉えたことにある。

本論文は、序論は1から5、本論は第1章から第5章、結論から構成される。序論の1では、オランダ国内におけるベルラーヘに対する関心の度合いを示し、ベルラーヘの生涯を年代記的に整理した。2では本論文の構成を示し、3では既往研究の成果を整理して問題点を抽出し、4では本論文の目的を示し、5では論文執筆にあたって利用した一次史料の内容と所在地を示した。

本論第1章では、ベルラーヘの多様な思想の社会的な背景を捉えるため、19世紀半ばから第一次世

界大戦頃までの間のオランダの政治、経済、都市、文化の動向について考察を行った。第1章の考察を通じて、19世紀後半から20世紀初頭にかけて、オランダは経済、政治、人口、インフラ、宗教、文化等のあらゆる側面において急激な変化を経験したことを明らかにした。特に1890年代以降は、オランダ社会が大きく転換した時期であった。工業化の結果、オランダは経済力を強めていったが、工業化や農業恐慌や農業不況に伴う飢餓、急速な都市化が生んだコレラやインフルエンザ等の疾病、失業等の社会問題は労働運動や社会主義運動を生み出した。1860年代から徐々に労働組合運動が活発化し、1890年代には社会主義政党が発足し、議会に加わるまでに至った。急激な都市への人口集中は、都市のスラム化と慢性的な住宅不足をもたらした。1902年の「住宅法」の成立後、住宅における投機的要素を排除し、住宅建設のみを目的とした協同組合運動が活発化し、住宅建設に建築家が参与する機会が生まれた。自治体が都市問題に直接関与することが認められ、中でもアムステルダム市は1905年に「建築条例」を定め、居住環境の水準とともに、美的水準も定めた。1914年以降は、社会民主主義労働者党(SDAP)が住宅建設に大きく関わっていった。第一次世界大戦によって住宅産業は崩壊の危機に瀕し、自治体が実質的に住宅建設を担う存在となった。文芸運動は政治・経済と連動する側面を持っていた。「80年代の運動」は、資本主義的近代化をオランダ文化再生の好機と捉える文芸復興運動であり、その特徴は極端な個人主義とロマンティシズムに芸術の基盤を求めたものであったのに対し、「90年代の運動」は、資本主義を芸術の退廃の原因と考えてマルクス主義、社会民主主義に基盤を求めるとともに、芸術は社会に奉仕するべきであるという理念を持ち、「コミュニティ・アート」を追求するものであったことが分かった。

第2章では、ベルラーへの建築理念と意匠的特質をより鮮明にするため、ベルラーへを取り巻くグループとの理念や造形における共通性と差異について考察を行った。第2章の考察を通じて、ベルラーへとアムステルダム派、デ・ステイル、機能主義といった建築グループの間には、共通性とともに大きな差異があることが分かった。まず、ベルラーへも「アムステルダム派」も、「コミュニティ・アート」の立場から、建築は社会に奉仕するものであるとして捉えていたが、ベルラーへが「個性」を超えたものによって社会を志向したのに対し、「アムステルダム派」は「個性」によって社会に訴えかけようとしていたことが分かった。デ・ステイルは、当時の時代精神を「普遍性」と結びつけた上で、神智学者スフーンマーケルスの実証的神秘主義に依拠し、水平・垂直・三元色といった形式的で、空間、支持、場所といった環境・技術的な与条件を排除する抽象的な新造形主義の原理を、世界を統一する原理として追求した。ベルラーへの建築とJ.ダウカーを代表とする機能主義の建築は、本質的に性質の異なるものであった。機能主義は美的な要素や造形的な要素を排除し、建築を、他の工学同様に科学として捉え、客観的で測定可能な基盤に還元することを主張し、自然の経済法則を根拠に、経済効率性や構造技術を極限まで追求することを正当化した。それらの建築グループは、建築を通じて社会に対して理想像を示したり、諸問題を解決する理念なりを示そうとしていたという点において共通性を見出すことができた。しかしながら、ベルラーへの建築理念とそれらの建築運動の掲げた建築理念や造形とは、根本的に異なる性質のものであったことが明らかとなった。また、ベルラーへと同時代の20世紀前半のオランダにおける近代建築運動は、一元的ではなく、多元的に展開していたことが明らかとなった。

第3章では、既往の研究には、ベルラーへの思想に関して、ベルラーへの著書の体系的な考察を通

じてその理念を捉えたものはないことを踏まえ、一次史料におけるベルラーへの言説から、その多様な思想や概念を系統的に考察し、ベルラーへが、1880年代のオランダ文芸運動の個人主義性に対する批判に端を発し、1890年代から1900年代初頭にかけて、個人よりも上位の普遍的な精神、共通の世界観に基づく建築や芸術を目指すという理念を確立していたことを明らかにした。その上で、ベルラーへがその後に取り入れていった社会民主主義、コミュニティ・アート、ザッハリッヒカイト、標準化などの様々な思想や概念は、全てこの「普遍性」の理念を基軸としたものであり、この理念と矛盾しないよう整合性を取りつつ、しかも独自の解釈も加えながら展開していったことを明らかにした。

第4章では、第一次世界大戦前後から兆候を見せ、蘭領東インド旅行において明確に示された「特殊性」の理念について、ベルラーへが1923年に蘭領東インドを訪れた際の紀行である『私のインド旅行』を中心に考察を行い、ベルラーへが、その晩期において「普遍性」の理念を相対化した上で、「普遍性」の理念と「特殊性」の理念の調和という、建築のあり方に対する新たな視点を表明したことを明らかにした。

第5章では、ベルラーへの建築作品の意匠的側面についての考察を行った。まず、ベルラーへの建築作品の定石的な系譜の捉え方によって、ベルラーへの建築作品を概観した。次に、第3章及び第4章で考察したベルラーへの建築理念のうち、第3章で考察した「普遍性」の理念が意匠にどのように反映したのかについて考察し、ベルラーへが、「我々が使うことのできる美学」と呼んだゼンパーヤル＝デュクの建築の原理に依拠することによって、「普遍性」という理念的な水準を実践的な水準にまで落とし込んだことを明らかにした。ベルラーへは、ゼンパーヤル＝デュクの理論に依拠しつつ、建築の本質を「空間を囲うためにさまざまな要素を一つへとまとめて組み立てていく構造の芸術」と定義し、「空間を包み込むこと」（被膜性）と「さまざまな要素を一つへとまとめて組み立てていくこと」（構築性）という2つの技芸を主にレンガの壁の中でどのように調停するかということ自らの意匠設計における課題としたことを明らかにした。次に、こうしたベルラーへの建築の原理に基づき、ベルラーへの建築作品の系譜の再構成を試みた。まず、1890年代半ば頃からアムステルダム証券取引所建設期にかけて、その原理に基づいた建築の実践を行い、ヘニー邸、ダイヤモンド労働者組合本部、アムステルダム証券取引所の意匠において、「被膜性」を概念化するとともに、「被膜性」と「構築性」をレンガの中に併存させるという意匠の統辞法に到達したことを明らかにした。その後、1910年代から20年代にかけては、オランダの国家的な規模で行われた住宅建設において、建築家の職能と意義を主張し、20年代の半ばから、今度は鉄筋コンクリートの架構式構造において、「被膜性」と「構築性」の表現に取り組み、ハーグ市立美術館において、一定の到達と統辞法を見出したことを明らかにした。以上による意匠の考察からベルラーへの建築作品の系譜を再整理すると、1. 様式時代、2. 「被膜性」と「構築性」という建築原理に基づいてレンガの組積構造にふさわしい表現を追求した時代、3. 社会芸術としての建築を主張した時代、4. 「被膜性」と「構築性」という建築原理に基づいて鉄筋コンクリートの架構式構造にふさわしい表現を追求した時代、というように再整理できる。つまり、ベルラーへの設計の実践は、新たな技術を積極的に取り入れることによる、絶え間ない統辞法の模索であったと捉えることができる。第4章で考察したとおり、ベルラーへは、70歳に近い晩期において「普遍性」と「特殊性」の理念の調和を理想としたのだが、意匠の特質としては、「普遍性」の理念を中心としたものであったことが示された。

早稲田大学 博士（工学） 学位申請 研究業績書

氏名 宇田 直史

(2011年4月21日現在)

種 類 別	題名、 発表・発行掲載誌名、 発表・発行年月、 連名者（申請者含む）
査読論文	日本建築学会計画系論文集収録論文 [1] H.P.ベルラーへの言説にみる「普遍性」の理念を軸とした思想の展開に関する考察，日本建築学会計画系論文集，2010年6月号，第652号，pp.1605-1614，宇田直史，入江正之（カテゴリーIII）
査読論文	[2] H.P.ベルラーへの建築思想における『私のインド旅行』の位置づけ，日本建築学会計画系論文集，2011年7月掲載決定，第665号，項数未定，宇田直史，入江正之（カテゴリーII） ※2011年4月5日採用（受付番号1009079）
講 演	[1] オランダ近代建築萌芽期における建築の思想と理論，ヘンドリック・ペトルス・ベルラーへ研究（1），日本建築学会大会学術講演会梗概集（中国），2008年9月，F-2，pp.545-546，宇田直史，入江正之
講 演	[2] ベルラーへの言説に見える二項対立的思考について，ヘンドリック・ペトルス・ベルラーへ研究（2），日本建築学会大会学術講演会梗概集（東北），2009年8月，F-2，pp.133-134，宇田直史，入江正之